

## 巻頭言

### イトカワからの贈り物

時の経つのは早いもので、怒濤のような3ヶ月から、もう1年が過ぎてしまった。「怒濤のような3ヶ月」とは、2005年9月に探査機「はやぶさ」が小惑星イトカワに到着してからの3ヶ月のことである。1年前の興奮は、まだ昨日のこのようである。それは、何年もの間忘れていた「わくわく感」というものを、久しぶりに思い出させてくれた期間でもあった。

一方で、このイトカワ探査がはるか昔のこのようにも思える。それは、イトカワという観測当初は風変わりだった小惑星が、もはや当然のものとして、研究者にそして世の中に受け入れられてしまったからである。すでに、「イトカワありき」で議論が進んでいる。わずか1年前までは、我々はイトカワのような微小な小惑星に対して、漠然としたイメージしか持っていなかったのであるが。

「はやぶさ」については、最終目的のサンプル取得がなされたかどうか不明であり、地球帰還も3年ほど延期された。したがって、ミッションが成功したかどうかの議論はあるのだが、少なくとも小惑星を研究する上で多くの新しい事実をもたらしてくれたことは確かである。その成果を端的に示しているのが、手元にあるイトカワの1/2000の精密な模型である。「はやぶさ」の話をするときには必ず持って行って、じかに模型を触ってもらっている。特に、小惑星などよく知らない子供たちが、目を輝かせながらイトカワの模型を触っていく。中には大人でも非常に興味を持って模型を見ていく人がいるのであるが、そのような光景を見ると、「はやぶさ」がやったことというのは意味があったと実感する。

今、「はやぶさ」に続くミッションの検討で四苦八苦している。多額の税金を使う以上、意味のあることをやらないといけないということは当然のことであり、科学としても、またアウトリーチや教育としてもいかに有意義なミッションとするか、知恵をしばっているところである。「はやぶさ」ミッションに限らず、惑星科学のいろいろな側面で、今後、子供たちをワクワクさせるような研究が多数行われることを期待したい。

さて、イトカワの模型を手にしていて、ふと、イトカワ表面にいる自分が頭に浮かんだ。イトカワに寝そべて宇宙を眺めたとすると、どうだろう。多分、非常に強い孤独感と、宇宙に対する畏れを感じることであろう。人生観も変わるかもしれない。もしかすると、小惑星から人類への最大の贈り物は、太陽系の起源や進化に関する知見などではなく、宇宙に対する畏敬の念を思い起こさせてくれることなのかもしれない。それは、まさに「星の王子さま」の実体験。そんなことが実現する日を夢見ている。

吉川 真（宇宙航空研究開発機構）